



生徒の機会と選択のために /  
大切にしている3箇条

1 生徒の人生を邪魔しない。  
アドバイスは余計なお世話

「資格を取れ」、「進学した方がいい」などの先回りした助言は、良かれと思えども余計なお世話。生徒自身の声に耳を傾け引き出したい。

2 生徒の人生にちょっとだけ  
お邪魔させてもらう

生徒たちが何かにワクワクと心が動いた瞬間に共感して、一緒に心から楽しむ。生徒の発言に自身が揺さぶられることも多々ある。

3 どんな生徒も大人も、今より  
良く生きたいことを心に置く

素行が悪く見える生徒であっても、人は誰でも今より良く生きたい、良い方向に向かいたいと思っていることを心に置いて向き合っていく。

CASE

3

生徒の心が動いた瞬間を見逃さず  
思考を深める対話を繰り返していく

若狭高校(福井県立) 小坂康之先生

生徒の言葉に揺さぶられ  
対話によって心を引き出す

宇宙飛行士の野口聡一さんが、高校生が開発製造したサバの缶詰を食べる様子を宇宙から動画配信。そのニュースが舞い込んだのは2020年のこと。宇宙日本食となった「サバ醤油味付け缶詰」を作ったのは若狭高校の生徒たち。初代の生徒たちが取組を始めてから14年が経っていた。その間、生徒と共に歩んできたのが小坂康之先生だ。

小坂先生は元々、2013年に統廃合され、現在の若狭高校の海洋科学科として生まれ変わった小浜水産高校の教員だった。サバ缶製造実習は小浜水産高校開校時から続く伝統だったが、より高品質な製品を目指し2006年に国際的な食品衛生基準であるHACCPの取得を進めた。HACCPはNASA(アメリカ航空宇宙局)が宇宙食の

開発のために基準を作成した起源があり、そのことを小坂先生が授業で伝えたとき、ある生徒が発した言葉がすべての始まりだった。

「それなら、わたしのサバ缶も、宇宙に飛ばせるんじゃないか？」

普通の大人なら、生徒たちの荒唐無稽な夢と受け止めていたかもしれない。しかし、目を輝かせていた生徒たちの本気のワクワクに、小坂先生自身が揺さぶられ共感したのだ。そこから学校の統廃合を経て、14年間の宇宙サバ缶開発が始まり、現在も引き継がれている。

生徒の気持ちに本気で寄り添い、夢を実現させることができたのは「対話」にあると小坂先生は語る。対話の重要性に先生が気づいたきっかけとなったのが、教員1年目の苦い経験だった。

「生徒たちから『授業がつまらない。先生たちの授業は中学の先生より下手』と言われたのです」



2007年のプロジェクト発足から14年かけて、先輩から後輩へと想いが引き継がれて完成した宇宙サバ缶。

授業をろくに聞いてくれないのは生徒たちのせいではなく自分の実力不足だったと痛感。それ以来プリントを工夫したり、体験的な授業を増やしたりすると、寝ていた生徒の8割は起きるようになった。しかし、まだ寝ていた生徒を起すことと怒って教室から出て行ってしまった。すると、リーダー的な存在の生徒が「先生は悪くない。追いかけてくれない」と言ってくれた。彼の一言で他の寝ていた生徒も起きて、授業が楽しいと言ってくれるようになった。生徒たちの変化に小坂先生は、彼らは伸びたい、正しい方向に教員と

＼ 小坂先生の「現在地」 ／

探究が教科授業の改善に繋がり  
進路との接続が明確になった

**小** 坂先生は、昨年度まで進路部長を担当(今年度はSSH研究部長)し、その間、国公立大学への進路実績が向上した。偏差値だけではなく、生徒たちが学問領域で進学先を選択するようになってきた。これは探究を、自分のやりたいことを見つけ生き方を知る「自分の動詞探し」と位置つけた効果だと小坂先生は考えている。また、探究によって教員の、生徒一人ひとりを丹念に見取り、生徒の思考を深める問いを発する力が育ってきた。これは生徒支援、キャリア支援だけでなく、教科授業の改善にも繋がる。探究への真剣な取組が、教員の授業力と進学実績の向上に繋がったのだ。

「授業が面白くないと生徒たちの成績は上がりません。教員の授業磨きになる探究は全校教員で取り組まなければもったいないです」



探究の授業は1クラスを複数の教員が担当。あくまで生徒主体のため、先生たちは生徒の様子を見守り、生徒の心に火がついた瞬間を見逃さないように努めている。

こさか・やすゆき ● 東京水産大学卒業後、水産高校教員を目指し小浜水産高校に初任。地域と連携した海の再生活動や地域食材を利用した商品開発などを指導。2007年から宇宙サバ缶の開発に携わる。2013年、統廃合により若狭高校海洋科学科に転任。福井大学教職大学院、福井県立大学大学院生物資源学研究科修了。博士(生物資源学)。

「先日、うちの生徒と近隣の小学校に出張授業に行ったのですが、その学校に新任の先生がいて、生徒の見取りが実にうまい。『若いのにすごいですね』と感心して教頭先生に伝えたら『小坂先生の教え子でしょう』と。大人になつていたので気づかずびくりして。自画自賛してしまいました(笑)」



歩みたいのだと強烈に感じた。「それまでの自分はしゃべる一方で、生徒の声に耳を傾けていなかった。彼らの声に耳を傾け、対話することになり一人ひとりと向き合えるようになりました」

生徒との対話は、何が好きで、何に価値を感じ、何を心地よいと思うか、もともと生徒たちがもっているものを引き出すためだ。さらに深めるためには「なぜそう思う?」「どこも探究の時間で実践し続けている。「探究は一人で行うと思いが固定化して深まりにくいのです。他者の言葉や他者に向けて発することに

探究のプロセスに対話を  
組み込むことで深みが増す

「探究は一人で行うと思いが固定化して深まりにくいのです。他者の言葉や他者に向けて発することに

「他者との対話を踏まえて、生徒一人ひとりの心や頭の中で起きている変化を見逃さない見取りの力と共に、探究を楽しむ姿勢が教員に求められています」

対話で育った卒業生が  
見取りが上手な教員に

若狭高校は10年以上前から探究に力を入れてきたが、高校での探究が大学の研究のように専門的になりすぎることには懸念がある。統廃合の際、若狭高校の海洋科学科となる旧小浜水産高校のあり方についての目標設定を、ステークホルダーとなる地域の漁師や企業、大学の教員と共に検討した。期待されていることについて、先生たちは水産

に関する最新の知識や技術の習得と考えていたが、ステークホルダーたちからは「興味や関心、思考力や協働性を育ててほしい」と言われた。地域から求められているのは資質・能力だったのだ。